

二〇一六年一〇月一八日(参加者一四名)

一亭の簷牙を仰ぎ秋惜しむ
 閉園にあらずよ猪に扉を閉ざす
 水際に屯してをる道をしへ
 草の実に触れもして愛づ薬草園
 六甲山の裾廻に奏で紅葉川
 お茶室へ水引草のつづる径
 山の日に黄金をこぼす萩もみぢ
 きざはしは水の鍵盤秋奏づ
 そこに猪のぬた場や秋山路
 木洩れ日の煌めき小川澄めりけり
 苔むして露に濡れたる石畳
 薬効を確かめ巡る秋の苑
 青天井映す水面へ赤とんぼ
 階落つるたびに高鳴る秋の川
 秋の蝶ハーブの園をジプシーす
 ゆく雲を映して池の澄めりけり

うつぎ

うつぎ

うつぎ

うつぎ

菜々

菜々

菜々

菜々

わかば

わかば

わかば

満天

満天

満天

満天

六甲を映して小さき秋の池
たか子

四阿の裏の築山竹の春
たか子

秋の人ひと並びせる池塘かな
たか子

逍遥の小径は石踏の花明り
ぼんこ

蘭亭の簷牙映して池澄める
ぼんこ

翠黛のしるき影落ち湖澄める
ぼんこ

秋うらら亀のよりくる汀かな
はく子

奥池へ道の木の実を拾ひつつ
はく子

猪垣に人間たちの出入り口
よし子

雨雲の晴れゆく空や返り花
よし子

目に余る猪の狼藉植物園
明日香

錦繡の山湖を抱擁す
せいじ

休耕田占領したるあわだち草
有香

定例会の選

二〇一六年一〇月一八日(参加者一四名)